論　文　ニダバ (*Nidaba*) 40(2011), 82-91

スラブ語の単一要素文の機能構造

―文要素の形式的分割性と機能的分割性の諸タイプを中心として―

本城二郎

1．序論

本論は、スラブ語に汎用される文タイプの一つとして、主語項（S）を欠くいわゆる無主語・非人称文と称される単一要素文について、その形式構造およびそれに対応する機能構造、さらには広くその類型的特徴を明らかにすべく、スラブ語の比較分析を試みる。分析方法としては、プラハ言語学派を特徴づける諸理論の一つであるチェコ語文型論および機能的文構成（FSP※1）に基づき、述語動詞の示差的特徴の一つ文要素の“分割性”を示す形式的・機能的諸特徴を、スラブ諸語における諸文例の比較・観察を通じて、記述・列挙し、さらには共有特徴の有無の分布から抽出可能なタイプの種類に基づき、スラブ語域内における類型化を目指す。その際、分析基準としては、前者（つまり形式構造）のS（主語）-V（動詞）（-C（補語）/O（目的語））分割性と後者（つまり機能構造）のTh（テーマ）-Tr（移行）-Rh（レーマ）分割性※1という２種類の基準が関与的で、幾つかの下位タイプが推定されるものの、次の４タイプが潜在的に設定可能と考えられる。

・（－）主語項（S）欠如の非分割文（いわゆる無主語文）：V（-C/O/Ad）

　　i．V:Tr=Rh　　ii．V-C/O/Ad：Tr-Rh

・（＋）主語項（S）非表示の分割文（いわゆる非人称文）：(S-) V（-C/O/Ad）

　　iii．(S-) V：(Th-) Tr=Rh　　iv．(S-) V-C/O/Ad：(Th-) Tr-Rh

なお、本発表では、スラブ語における単一要素文の多様なバリアントの観察結果に基づき、西欧諸言語に代表されるSAE※2（標準均一的欧州語）の“形式主語（S）＋定動詞（V）”によるシンタグマ固定を対極として、スラブ諸語内部において観察される類型タイプの分布として、ポーランド語・東スラブ語タイプ―中核的―、SAE指向ゲルマン化スラブ（チェコ語／スロバキア語／ソルブ語）・南スラブ語北群（スロベニア語／セルビア・クロアチア語）タイプ―中心的―、バルカン・スラブ語（ブルガリア語／マケドニア語）タイプ―周辺的―、が設定可能であり、さらに中核域がポーランド語タイプと東スラブ語タイプに下位分類可能であることを明らかにする。

2．スラブ語の単一要素文の形式構造と機能構造の諸特徴

文タイプの分類には、通言語的には、統語構造に基づく主語（S）と述語（P）の“分

割性”と話者態度に基づく“モダリティ性”の２類が関与的である。特に前者の“分割性”を基準にした場合、φ主語表示の無主語文や非表示の不定、・総称主語文/非人称文（いずれも単一要素文）と主語文/人称文（２要素文）という２つの文タイプに分類可能である。スラブ語の文タイプ分類の際には、述語の示差的特徴が主要な基準となることから、φ動詞表示の名詞文を除く上記２タイプが主な対象となっている。以下、本論では、無主語文および不定・総称主語文を含む単一要素文の特徴を列挙・記述すべく、形式・統語要素（S、V、O/C/Ad）から構成される形式構造と機能要素（Th、Tr、Rh）から構成される機能構造の比較分析を試みる。

２．１．主語（S）項欠如の非分割文（いわゆる無主語文）

形式的にも主語（S）項を欠くφ主語表示の無主語文は、スラブ語では、チェコ語やソルブ語など一部ゲルマン化スラブ語において２要素文化の傾向が顕著ではあるものの、特に自然現象や心理・知覚を表示する文としては、今なお汎用されている。以下の(a)タイプがそれに相当し、(b)タイプで主語非表示の非人称文と区別可能である。

(a) タイプ：S×P 融合タイプ

述語（P）が示す行為／状態とその担い手／発起者の“意味的非分離性”に基づき、後者（担い手／発起者）が前者（行為／状態）に融合した結果、形式的には主語（S）項を欠く述語（P）項のみの非分割構文タイプで、述語の表示形式は次の２類がある。

① 非人称動詞、繫辞動詞＋（属性）述語副詞

② 非人称使用の動詞（潜在的には分割文の動詞で、語彙的意味の変更により非分割文使用が可能な人称動詞）

(b) タイプ：(S-) P 二次的分割タイプ

述語（P）が示す行為／状態とその担い手／発起者の“意味的分離性”に基づき、話し手に対して担い手／発起者の出現が抑圧された擬似的非分割構文タイプで、形式的には再帰文や-no/-to 述語文など２要素分割文から派生される二次的構文や不定詞文に代表されるような非人称構文のタイプ。

(a) タイプ述語の特徴は、主語（S）項の欠如のみならず目的語（O）項の欠如、つまり行為／状態の出発点と方向が一つに統合した述語（P）項の提示であり、スラブ語では特に**自然現象の存在提示文**に顕著に表われている。以下、非人称動詞の例を列挙・観察する。

● 形式・機能構造は全て V:Tr=Rh の融合タイプ（対格再帰代名詞はいずれも ThPr）

（1）Cz. ※3 Prší.（雨が降っている。）/ Sněží.（= Padá sníh. /２要素文/）（雪が降っている。）/ Stmívá.（日が暮れてきた。）/ Oteplilo se.（暖かくなった。）

（2）Slk. ※3 Svitá.（日が明けつつある。）/ Pekne napršalo.（大雨が降っていた。）

（3）Pol. ※3（Pada deszcz. /２要素文/（雨が降っている。））/ Błyska se.（稲光がしている。）/ Przejaśnia się.（明るくなった。）

（4）Rus. ※3（Dožd' / Sneg idjot. /２要素文/（雨/雪が降っている。））/ Svetajet.（夜が明

けつつある。）/ Stalo tepleje.（暖かくなった。）

（5）Sln. ※3 Zablisnilo je.（稲光がした。）/ Dežuje.（雨が降っている。）/ Ohladilo se je.（涼しくなった。）

（6）Bul. ※3 （Vali dăžd. /2要素文/（雨が降っている。））/ Zazorilo se e.（日が明けた。/ Zavaljav.（雨が降り始めた。）/ Zaesenjava se.（秋になった。）

再帰動詞と非再帰動詞の使用の相違は、個々のスラブ語ごとに語彙化、慣用化されていて、単一要素文の非人称動詞や繋辞動詞＋名詞に対して２要素文の“存在”構文も使用されていることから、一義的に個別特徴を列挙するのは困難なものの、意味核としての名詞の有無が関与的と思われる。その際、再帰動詞による単一要素文表示に対して、対応可能な非再帰動詞による２要素文表示において、主語（S）と述語（P）の意味関係という側面に注目する必要がある。スラブ語では、次の２つのタイプが考えられる。

(a) 主語（S）の意味が述語（P）の意味に対して全体的または部分的に重複するタイプ

Cz. Svítá.（日が明けつつある。）（≒ To svítá. /2要素文/（日が明けつつあるのだ。））

S.-Cr. ※3 Sviće.（日が明けつつある。）（= Dan sviće. /2要素文/）

(b) 意味核が主語（S）位置の名詞で、述語（P）は行為の仮定・局面を表示するタイプ

Rus. Sneg idjot. /2要素文/（雪が降っている。）

Rus. Grom gremit. /2要素文/（雷が鳴っている。）/ Gremit.（雷が鳴っている。）

ここでは、スラブ語内の傾向として、チェコ語やセルビア・クロアチア語が単一要素文への傾向を、ロシア語が２要素文への傾向を、それぞれ示している。

次に、**繋辞動詞＋（属性）述語副詞**の例を観察するが、その際、特に述語副詞と同義である名詞との意味的一致、さらには、それらの統語的相違（つまり述語の前者と主語の後者）が反映する単一要素文と２要素文との類義性、それに加えて、スラブ語に汎用される**与格（D）担い手項付心理状態表示文**について検証する。

● 形式・機能構造は全て V-C：Tr-Rh の分離タイプ（担い手項はいずれも DTh）

（7）Cz. Je tam **teplo**.（あちらは、暖かい。） Je **mi** **zima**.（私は、寒い。）

Bylo už **tma**.（すでに暗かった）≒ Byla už **tma**. /2要素文/（すでに闇があった。）

述語（P） 主語（S）

Pol. Bardzo **mi** tu **dobrze**.（ここは、私にはとても居心地がいい。）

Rus. **Mne** očen' **cholodno**.（私は、とても寒い。）

Sln. Bilo je **tema**.（暗かった） Bilo **mi** je **mraz**.（私は、寒かった。）

汎スラブ語的特徴を持つ単一要素文の一つは、非人称使用の動詞による位格構文、つまり副詞（AD）-述語（P）で、その使用域に関しては、東スラブ語やスロバキア語やポーランド語、それに南スラブ語北群の方がチェコ語やブルガリア語よりも広い傾向がある。

（8）Cz. Ve věži straší.（塔の中には、幽霊が出る。）

Pol. W korytarzu ucichło.（廊下は、静まり返った。）

Rus. V zale pogaslo. (ホールの中は、火が消えた。)

Sln. Na vrata je pobobnelo. (ドアはガラガラ鳴った。)

一方、**対格 (A) 対象項付非人称文**はスラブ語の一部で頻用されるが、その使用域の傾向は上記に同じである。但し、この構文が狭い使用域を持つチェコ語に関しては、非人称文の主語が特定できない場合に主語 (S) 項に指示代名詞中性単数形の to (それ) や不定代名詞の něco/cosi (何か) を挿入する傾向から、広く２要素文への傾向を示している。

● 形式・機能構造は全て V-O : Tr-Rh の分離タイプ (対象項は ThPr または DTh)

(9) Cz. Táhne ho **to** domů. (= **Něco** ho táhne domů.)

(彼は、家へ引っ張って行かれる) (= 何かが彼を家へ引っ張っていく)

Pol. Kolegę nam poraniło. (我々の同僚は、傷つけられた。)

Ukr. ※3 Verbu zneslo. (猫柳の匂いがした。)

S.-Cr. Vidi, jutros vas isprašilo! (ほら、あなたは今朝鞭打たれたんだ！)

対格 (A) /位格 (Loc) 担い手項付物理・心理状態文も、スラブ語全体で汎用される。

●形式・機能構造は全て V-O/Ad : Tr-Rh の分離タイプ (担い手項は ThPr または DTh)

(10) Cz. Bolelo mě v zádech. (私は、背中が痛かった。) (= Bolela mě záda. /２要素文/)

Sorb. ※3 Je jednu wotbiło. (１時を打った)

B.Rus. ※3 U ich nezdarova naham. (彼らは、足が痛い。)

Bul. Boljalo go zăb. (彼は、歯が痛い。)

非対格 (I) 手段項付非人称文はスラブ語の中でも特に西スラブ語に顕著で、例えば“手段・道具”の具格 (I) 目的語を支配する Cz. házet (～を投げる) /třást (～を揺らす) /smýkat (～を引っ張る) タイプの動詞による非人称 (単一要素) 構文に特徴的に現れている。他方、東スラブ語では、このタイプの動詞が“手段・道具”項も対格 (A) 表示となる傾向がある。但し、**臭覚や聴覚を含む知覚文**における具格 (I) 目的語使用という現象に関しては、西スラブ語も東スラブ語も一致が見られる。この構文中でも、チェコ語は不定の主語 (S) 項に対して指示代名詞 to (それ) を挿入するのが通例で、２要素文への傾向を示している。なお、南スラブ語では、前置詞格 (Loc) 表示が用いられる。

● 形式・機能構造は全て V-O : Tr-Rh の分離タイプ (手段項は DTh または Rh)

(11) Cz. Házelo to jím. / /具格 (I) 目的語付２要素文/ (彼の体は、激しく動いた。)

Pol. Szarpnęło pociągiem. /具格 (I) 目的語/ (列車は、ぐいと引っ張られた。)

Rus. Ot nego nesjot potom. /前置格 (Loc) 目的語/ (彼は、汗臭い臭いがする。)

S.-Cr. U sobi miriše na staro drvo. /前置格 (Loc) 目的語/

(部屋の中は、古い木材の臭いがする。)

無表示 φ の主格 (N) 主語項と目的語/副詞句項に基づき設定されるスラブ語の非人称構文に対しては、特に汎用される文法形式が抽出可能で、それは次のスキーマと見なされている。以下、使用例を比較観察し、スラブ語における個別特徴の抽出を試みる。

◎ 非人称構文の基本スキーマ：

状態動詞/運動動詞述語 (P) —影響結果担い手表示の与格 (D) —到達状態表示の副詞 (AD) /位格 (Loc)

(～です/～に行く　～に (は)　～で　～へ/まで)

● 形式・機能構造は全て V-O-C/Ad : Tr-Th-Rh の分離タイプ (意味主語役割の担い手項は ThPr または Dth)

(12) Cz. Daří se mi dobře. /属性副詞 (ADQual) の義務的付加表示/
(私は、気分がよくなってきた。)

(13) Slk. Dobre sa nám povodí. (我々は、気分がよくなってきた。)

(14) Pol. Wiodło się nam nie bardzo dobrze. (我々は、あまり気分が良くなかった。)

(15) Rus. Mne grustno za toboj. (私は、あなたのことを思って悲しい。)

(16) Búl. Ne mi e do pesni. (私は、歌いたくない。)

2．2．主語項 (S) 非表示の分割文 (いわゆる非人称文)

話者による主語 (S) の特定が困難な文脈では、主語 (S) 役割の不定要素の存在が述語 (P) の“一般化”により確認可能となる。それは、述語 (P) が含意する発話の受け手の存在や受け手に対する述語 (P) の関係性により規定される。スラブ語のこのタイプの構文としては、非人称再帰文や非人称-no/-to 述語文※4、さらには非人称与格再帰文や非人称不定詞文が代表的で、形式的には、非人称再帰文では、述語語尾が担う３人称中性単数カテゴリーによる φ 主語表示や非再帰動詞への再帰代名詞付加による φ 主語代用が広く観察される一方、機能的には、前者 (述語語尾) が担う TrPr 役割と後者 (φ 主語または再帰代名詞) が担う ThPr 役割が関与的となる。

例文. Cz. Jde se tam hodinu. (あそこへは、１時間で歩いて行ける。)
P:Tr S:ThPr Ad:Th Ad:Rh

2．2．1．非人称再帰文

単一要素非人称再帰文は、人称主語 (S) の存在を含意する構文として汎スラブ的と見なされている。とりわけ、３人称単数再帰動詞形は、非明示的な人称主語 (S) の存在を含意し、表示する行為が具体的でも一般的でも潜在的でもありうることから、広く、話し手および受け手による行為への関与をも許容する。この構文は、スラブ語文法では、通常、２要素文からの派生的・二次的構文と見なされている。形式的には、主語 (S) が明示されないため主語スロットの不在が確認されるものの、意味的には、再帰代名詞が不定主語役割を果たしスロットを埋めるものと解釈される。他方、機能的には、述語動詞語尾により表示される３人称中性カテゴリーが担う移行プロパー (TrPr) 役割および不定主語役割の再帰代名詞が担うテーマ・プロパー (ThPr) 役割が関係することになる。スラブ語内では、主に西スラブ語において汎用され、特に対格目的語や再帰存在動詞の使用が許容されるポーランド語には、多様なバリアントが存在し、生産的な手段となりつつある。南スラブも、ポーランド語と同様、比較的多様なバリアントが存在し、対格

目的語や再帰繫辞動詞の使用が見られる。他方、不定主語役割の３人称複数動詞が無標で一般的な東スラブ語では、その使用域がかなり限定されている。

● 形式・機能構造は全て s-V-Ad : ThPr-Tr-Rh の擬似人称分離タイプ（不定主語役割の再帰目的語項は ThPr）

(17) Cz. Jde **se** tam touto ulicí. （あちらへは、この通りを通って歩いて行けます。）

歩いて行く　自身を/人が　あちらへ　この通りを通って

(18) Slk. To znamená, že **sa** nepoletí? (=, že nepoletíme?)

それは　意味する　～ということ　自身を/人が　飛行機で回らない　我々が飛行機で回らない

（それは、我々が飛行機で回らないだろうという意味ですか。）

☜※5 西スラブ語における“話し手／受け手”集団（“我々、貴方達”）含意の不定主語

(19) Pol. Ach, miewało **się** tu randki. (= Miewałem tu randki.)

ああ　何度も持った　自身を/人が　ここ　デートを　私は何度も持った

（ああ、(私は) ここでよくデートをしたものだ。）

☜ ポーランド語に特異な“話し手／受け手”指示専用の不定主語

(20) Bul. Čulo **se** vednaga duma, če .... （直ぐに、... という言葉が聞こえた。）

聞いた　自身を/人が　直ぐに　言葉　～という　☜ 南スラブで許容される対格目的語付再帰文

(21) Rus. Ob etom uže govorilos'. （それについては、すでに話されている。）

～それに関して　すでに　言われていた　書かれていた

２．２．２．非人称-no/-to 述語文

非人称-no/-to 構文は、対立関係にある非人称再帰文と同様、２要素文の派生的・二次的構文と見なされる。形式的には、受動分詞が潜在的主語（s）の存在を含意することから、主語項の位置的抑制、つまり主語スロットの欠如と関係する一方、機能的には、述語における受動分詞が表示する中性単数カテゴリーと繫辞が表示する３人称カテゴリーにより確認される不定一般・総称主語等の潜在性およびそれらが担うテーマ・プロパー（ThPr）役割が関係することになる。スラブ語には多様な表示バリアントが存在する中、南スラブ語では一部定型表現を含む周辺的な構文と見なされ、チェコ語やスロバキア語やソルブ語等では使用頻度が低く、専ら“結果状態”を意味する一方、ポーランド語やウクライナ語、さらには白ロシア語では、その使用域が広範で、(主格上昇を引き起こさない) 対格目的語の保持、さらには“動作”述語の使用をも実現している。

● 形式・機能構造は Ad-v-Vpassive(-s) : DTh-TrPr-Tr=Rh(-ThPr)の擬似人称融合タイプ（場所副詞句の擬似担い手項は DTh、繫辞動詞は TrPr、受動分詞は Tr=Rh）

☜ Rh 述語による述語強調構文の一種

(22) Cz. Je s námi počítáno. （我々には、考慮がなされている。）

～です　我々に　考慮されて

(23) Pol. Wozy zaparkowano w parku. （車は、公園内に駐車してあった。）

車（車両）を　駐車されて　公園の中で

(24) Ukr. Kavu bulo dopyto.　（コーヒーは、飲み干してあった。）

コーヒーを　～でした　飲み干されて

(25) Bul. Dadeno, baj Nikola.　（OKだ／了解した、ニコラおじさん。）

与えられて　おじさん　ニコラ

2．2．3．非人称与格再帰文

非人称与格再帰構文は、対応する２要素文への再帰代名詞の付加により形成される派生的・二次的構文と見なされる。そこでは、２要素文の主格に対して単一要素文の与格が（意味）主語役割を、２要素文の自／他動詞に対して単一要素文の再帰代名詞付自／他動詞が述語役割を、それぞれ担うことから、人称構文から非人称構文への態派生という現象が顕著に現れている。スラブ語の場合、与格付再帰構文が西スラブ語と東スラブ語に限定されているのに対して、与格なし（人称／非人称つまり２要素／単一要素）再帰構文はスラブ語全体に広く観察されている。この構文は、行為とその担い手の関係を特徴づける（様態副詞等に代表される）属性表示子（Qual）が必須項となり、その意味特徴として［+/-快く］または［+/-困難なく］が関与的である点が特徴的である。形式的には、与格なし構文では明示的な主語（S）を持たない非人称動詞が中心となることから、再帰代名詞が一般・不定主語役割を担うことによって主語項の位置を占めることになる一方、与格付構文では与格が（意味）主語役割を担うことになる。機能的には、与格なし構文と与格付構文の相違にかかわらず、潜在的には、属性担い手としての再帰代名詞により表示される３人称カテゴリーが担うテーマ・プロパー（ThPr）役割や与格により表示される（状況・文脈）共指示性カテゴリーが担うテーマ（Th）役割／ダイア・テーマ（DTh）役割に対して、述語動詞が担う移行（Tr）役割と属性表示子が担うレーマ（Rh）役割が普く関係することになる。

● 形式・機能構造は全て s-V-O-Ad : ThPr-Tr-DTh-Rh の擬似人称分離タイプ（意味主語役割の与格目的語属性担い手項はDTh）

(26) Cz. Psalo **se** **mi** to <u>snadno</u>.　＜/2要素文/：Psal jsem to snadno.

書いた　自身を/人が　私に　それを　容易に　　書いた　私は～です

（私には、それを書くことが容易だった。）（私は、苦もなくそれを書いていた。）

☜ Th役割属性担い手＋Rh役割属性［-困難なく］表示子。

(27) Pol. Dobrze **mi** **się** tę książkę czyta.（私には、その本は/を十分読める。）

よく　私に　自身を/人が　その本を　読む　☜ Th役割属性担い手＋Rh役割属性[+十分に]表示子。

(28) Rus. <u>Sladko</u> **mne** zdes' **živjotsja**.　（私は、ここで暮らすのが楽しかった。）

快く　私に　ここで　暮す　☜ Th役割属性担い手＋Rh役割属性［+快く］表示子。

(29) S.-Cr. Ne gine **se** lako.　（人は、容易に殺されることはない。）

～ない　殺されて　自身を/人が　容易に　☜ Th役割属性担い手＋Rh役割属性[-困難なく]表示子。

2．2．4．非人称不定詞文

非人称不定詞文は、バルカン・スラブ語を除き、モダリティ表示の単一要素文としてスラブ語では汎用されている。その使用は、モダリティ/訴えの受け手/発起者の存在が前提となる場合には指示的・規範的意味を、予定された行動の指示者の存在が前提となる場合には期待的意味を、それぞれ持つことが知られている。モダリティ／訴えの受け手／発起者の非明示性により、モダリティ／訴えの受け手が具体的な場合にも、使用可能となる。とりわけ、訴えの不定詞文では、“無効性の除外”（つまり「～しないことは許されない」）が含意され、結果として“義務・必要性”（「～すべきだ」）を表示する客観的モダリティが付加されることになる。他方、否定の訴えの不定詞文では、“有効性の除外”（つまり「～することは許されない」）が含意され、“命令・禁止”（「～してはいけない」）を表示する客観的モダリティの付加がなされる。これらは、現在、スラブ語の文法形式として広く観察されている。なお、この構文がスラブ語の本来形式であることは、（例えば、Cz. muset（～しなければならない）/smět（～してもいい）/mít（～すべきだ）の人称助動詞化による派生構文としての）２要素助動詞文の発達から明らかである。形式的には、主語（S）が明示されず、主語スロットの不在が不定・一般主語の存在を含意する一方、バリアントとしての与格付不定詞文においては、与格目的語が意味主語役割を、（表示の有無にかかわらず）繋辞動詞が助動詞役割を、不定詞が本動詞役割を、それぞれ担うことになる。他方、機能的には、繋辞動詞語尾の３人称中性カテゴリーまたは非表示の文イントネーションが担う移行プロパー（TrPr）役割および不定詞が担う移行（Tr）役割およびφ不定主語が担うテーマ・プロパー（ThPr）役割、さらに与格付構文の場合には、与格目的語が担うダイア・テーマ（DTh）役割が、それぞれ関係することになる。スラブ語内では、主に東スラブ語に多様なバリアントが存在し、SAE に顕著な助動詞化へと向かわない本来的な客観的モダリティ表示文法形式として今なお頻用されている。

●形式・機能構造は(v-)Vinf/Vinf-0：(TrPr-)Tr=Rh/Tr-RhPr の擬似人称融合タイプ

（繋辞動詞は TrPr、不定詞は Tr=Rh、対格目的語は RhPr）☜ 選択項 TrPr 繋辞動詞の助動

(30) Cz. *Není* se **nám bát** těch, kteří ... （=/２要素文/：Nemusíme se bát ～, ...）

～でない　我々に　恐れる　それらを　... である～　　我々は～する必要がない　恐れる

（私たちは、... であるものを恐れる必要がありません。）

☜ 繋辞動詞＋与格主語＋“不必要性”の不定詞による客観的モダリティ付加。

(31) Pol. Cicho **być**!（=Musisz **być** cicho!）（静かにしないといけません。）

静かに　～です　君は～ねばならない　☜ “義務・必要性”の客観的モダリティ付加。

(32) Rus. Varjonuju rybu **ochladiť**.（煮た魚は、冷やします。）

煮た　魚を　冷やす　☜ 料理レシピ中の文で、“指示”を示す。

(33) Ukr. Ščo ž **robyty**?（何もすることが許されない＜何をするべきなのか。）

何　いったい　する　☜ “義務・必要性”の客観的モダリティ＞“義務”＋“禁止”

(「当然許されない」)) の客観的モダリティへのへの移行。

(34) S.-Cr. Samo ne **zaspati**! (つい寝込んではいけません。)

ただ　～ない　寝込む　　☜ “命令・禁止” の客観的モダリティ付加。

(注) ※1 FSP (機能的文構成) とは、文の Th (テーマ) -Tr (移行) -Rh (レーマ) 分割のことで、文要素が文中で果たす FSP 機能 (伝達機能) に応じて配列される文構成を意味する。無標では、基本配列である Th-Tr-Rh 語順により伝達価値の漸進的な発展に向かい、FSP 基本構造) を実現することになる。Tr 要素は、さらに法・時制カテゴリー表示子が固有に担う TrPr (移行プロパー) と (Th-Rh ネクサス) を可能にする定動詞概念内容部分が担う Tr (移行) に、Th 要素も、最も低い伝達価値をもつ ThPr (テーマ・プロパー) と最も高い伝達価値を持つ DTh (ダイア・テーマ) に、さらには、Rh 要素が最も高い伝達価値をもつ RhPr (レーマ・プロパー) とより低い伝達価値をもつ Rh 要素とに、それぞれ細分化可能で、その結果、下記の FSP 基本配列スキーマが提起される。なお、各要素の詳細は、Svoboda(1989)、Firbas(1992)を参照。

FSP 基本配列：ThPr-(ThPro-)Th-DTh－TrPr-(TrPro-)Tr－Rh-RhPr

※2 欧州地域言語学において慣用される基本概念の一つで、SAE 言語 (Standard Average European languages) の略称である。

※3 (語派別) 言語名の略称は、以下の通りで、以下それに準拠する。

西スラブ語：Cz. チェコ語/Slk. スロバキア語/Pol. ポーランド語/Sorb. ソルブ語

東スラブ語：Rus. ロシア語/B. Rus. 白ロシア語/Ukr. ウクライナ語

南スラブ語北群：Sln. スロベニア語/S.-Cr. セルビア・クロアチア語

※4 非人称-no/-to 述語文 (つまり、繋辞動詞を欠く中性単数受動分詞による述語文) の詳細については、本城 (2010) を参照。

※5 ☜ 記号は、観察・分析結果を示す。以下、これに従う。

3．結論

スラブ語の単一要素文の諸タイプおよび多様なバリアントの具体例を比較分析した結果、以下の傾向的特徴を抽出することが可能となった。

i．チェコ語は、ソルブ語とともに、指示代名詞 to (それ) の汎用や与格付不定詞文における繋辞動詞の法助動詞化により、比較的広い範囲で、単一要素文の２要素文化を実現しつつある一方、自然現象や感覚知覚などでは単一要素文を保持している点で、スラブ語の中では未だ中心的位置を占めている。機能的には、形式主語役割 ThPr 要素の to (それ)、不定・総称主語役割 ThPr 要素の se (自身)、意味主語役割 DTh 要素の与格などが特徴的な機能要素となる。

ii．ポーランド語は、例えば、人称再帰受動文の非人称化に代表されるような２要素文

の単一要素文化を可能にする文法化手段により、独自に多様な非人称文を発達させつつある点で、スラブ語内における位置は中核的と見なされる。機能的には、意味主語役割 DTh 要素の与格や強調述語役割 Tr=Rh 要素の-no/-to などが特徴的である。

iii. ロシア語を含む東スラブ語は、不定詞文における繫辞動詞の助動詞化に至らず、印欧語の保守性を未だ残存させている一方、繫辞動詞の弱化と平行した対格目的語付単一要素文の頻用や多様な無主語文の保持、さらには、３人称複数形人称代名詞に代表される非表示総称主語への傾向から、狭い範囲での２要素文化しか実現せずに非人称文が汎用されているという点で、未だ中核的位置を占めている。機能的には、意味主語役割 DTh 要素の与格/位格や法助動詞役割 TrPr 要素の（表示/非表示）繫辞動詞などが特徴的である。

iv. 他のスラブ語については、特に南スラブ語のセルビア・クロアチア語における意味主語役割 ThPr 要素の対格や存在動詞役割 TrPr 要素の再帰繫辞動詞、ブルガリア語に特異な“話し手／受け手”指示専用の不定主語役割 ThPr 要素の再帰代名詞および定型表現使用 TrPr 要素の-no/-to などが特異な現象と見なされる。

参考文献：

Běličová, H. et al. (1996): *Slovanská věta* (*Slavic Sentence*), Euroslavica:Praha.

Bauer, J. (1972): *Syntactica slavica* (*Slavic Syntax*), Univerzita J. E. Purkyně v Brně:Brno.

Čermák, F. (1997): *Jazyk a jazykověda* (*Language and Linguistics*), Pražská imaginace:Praha.

Comrie, B. et al. (1993): *The Slavonic Languages*, Routledge:London.

Erhart, A. (1982): *Indo-evropské jazyky* (*Indo-European Languages*), Academia:Praha.

Firbas, J. (1992): *Functional sentence perspective in spoken and written communication*, Cambridge University Press:Cambridge.

本城 二郎 (2010) :「環バルト海言語連合現象とポーランド語の特徴—形態統語レベルにおける共有諸特徴を中心として—」、『ニダバ』第 39 号.

Horálek, K. (1962): *Úvod do studia slovanských jazyků* (*Introduction to the Study of Slavic Languages*), SPN:Praha.

Kurzová, H. (1997): “Morphosyntactic processes in Europe”, *Proceedings of LP' 96 (ed. by B. Palek)*, Charles University Press:Praha.

Siewierska, A. (1998): *Constituent Order in the Languages of Europe*, Mouton de Gruyter:Berlin/New York.

Svoboda, A. (1989): *Kapitoly z funkční syntaxe* (*Chapters from Functional Syntax*), SPN:Praha.